

がん社会 を診る

中川 恵一

宿命論という考え方があります。世の中の出来事は全てあらかじめそうなるように定められていて、人の力では何も変えることができないというものです。

がんに関しても「がん宿命論者」は少なくありません。がんには放置してよいものと最初から転移があって治らないものがあり、どちらかは運命的に決まっているなどという考えの人もいます。がんになることも、がんで死ぬことも運次第で、自分の努力では変えることはできないという一種のあきらめと言えます。

そうすると、がんを知ろうとせず、予防に向けた生活を取らなくなりです。早期発見のために必要な検診を受けないことにもつながりかねません。こうした考えに身近な人を巻き込んでしまうことも考えられます。

確かに、がんには運不運も

がんを知り 運命変えよう

ありますし、死生観や死の受容も大切だと思えます。しかし、がんにならないに越したことはありませんし、なったとしても早期に発見して、なるべく楽に完治させるのがよいに決まっています。

遺伝はがんの原因の約5%にすぎません。原因の約3分の2は生活習慣で、早期発見の力ギはがん検診です。生活習慣を整え、検診をきちんとして受ければ、がんで死ぬリスクは大きく減らせます。がんは宿命ではないのです。

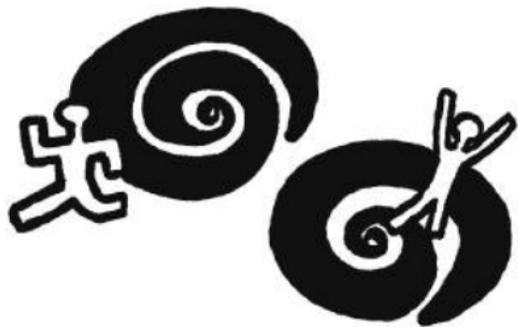
放置してよい場合は非常に限られます。小さな甲状腺がんは放置してもあまり大きさが変わらなかったり、消えてしまったりすることがあります。そういう場合は急いで治療するよりも、しばらく経過観察するほうがいいです。乳がんや前立腺がんにも一部そのようなタイプがあります。

だからといってすべてのがんを放置していいわけではありません。ほとんどのがんは見つかってから時間がたつほど、転移する割合が増えていきます。

放置する考えは標準治療とは違う方法です。そのような主張をするには、科学的な根拠を確かめる臨床試験で有効性を示す必要があります。ですが、まだそのような結果は示されていません。

少しの知識とそれによる行動変容で運命を変えることができますから、がんを知ることが非常に大切です。4月から始まった学校でのがん教育には大いに期待しています。

(東京大学病院准教授)



イラスト・中村 久美